
青春・片思い 「ぼく」 のとき

青春文庫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春・片思い 「ぼく」のとき

【Nコード】

N4365G

【作者名】

青春文庫

【あらすじ】

もうすぐ卒業式の「ぼく」彼の甘酸っぱい青春ストーリーが今始まろうとしている。

第一話 出会い（前書き）

「ぼく」はいつものようにランドセルを背負って面倒くさそうに、くつをちゃんと履かんまま家をでていった。

「今日で卒業か・・・」

「ぼく」はつぶやいた・・・

「ぼく」は小6の男の子、といってももうじき中学生になるんやけど・・・背は低く、前へならえ！ではいつも腰に手をあてる役目を果たしていた。

第一話 出会い

(一) 「ぼく」だった時

1 出会い

「ぼく」はいつものようにランドセルを背負って面倒くさそうに、くつをちゃんと履かんまま家をでていった。

「今日で卒業か・・・」

「ぼく」はつぶやいた・・・

「ぼく」は小6の男の子、といってももうじき中学生になるんやけど・・・背は低く、前へならえ!ではいつも腰に手をあてる役目を果たしていた。

「ぼく」には好きな女の子おった。女の子の名前は夢ちゃん。でも「ぼく」はおとなしい性格でなかなか告白できづについて卒業をむかえてしまってもてん・・・

んで卒業式の日、「ぼく」は夢ちゃんに告白できませんでした。「ぼく」には自分の背の低さと内気な性格をコンプレックスに思っていて、せやから自信もたれへんかってん。

でも「ぼく」この中では「中学校でもあえるからまた今度告ろ・・・」という気持ちが少なからずあっちゃいました・・・

そして中学校の入学式を迎えました

「ぼく」は学ランをはじめて着てウキウキ気分やった

そして入学式がおわってから「ぼく」は夢ちゃんと出会いました

夢ちゃんはぼくに

「ぼく君制服 ブカブカやん。まだまだおこちゃまヤネ」

と言ってきた・・・

「ぼく」は

「おこちゃまちゃいます」

とだけ言った としか言えなかった・・・こういう冗談交じりの会話は「ぼく」は苦手なのだ・・・

「ちやうクラスなってもたな」夢ちゃんが言った

「せやね・・・」「ぼく」が言った

ぼくは内心とても悲しかった

同じクラスの時さえ ちゃんと話されへんかったのに、違うクラスなってもたら もう合うことすらできひんのとちゃうかな・・・

でも「ぼく」にはだからといってどうする事もできなかった

それで 3階の教室に行ってクラスごとにわかれた

「ぼく」は同じ中学校の友達としかしゃべれなかった

新しい人と話することは「ぼく」のもっとも苦手とするところだった

そこで おくれて来た金髪の女の子が教室に入ってきた・・・

「ぼく」は怖くてみていられなかった・・・

・・・！！
なんと右どなりの席にその女の子が座った！

「ぼく」はますます怖くなり左ばかり向いていた

左には中学校からの友達のヨッシー（男の子）がいるからだ

そして そのひは とくになにもすることなく家にヨッシーと帰った

んで 次の日

教科書を取りにいくという作業をした

中学生にはもつことが難しいおもたい教材

二人で協力して 一階にそれをとりにいかなアカンかった・・・

担任の山田先生は

「これも交流の機会だ。よし 男女のペアで運んでもらおう！」

そう言いになった

反抗もできないまま ペアが勝手に決められていった

すると・・・

「ぼく」のペアに選ばれたのは・・・そう あの金髪の女の子であつた

「ぼく」は最悪な気分になった

「よし 今のペアおぼえとけよー ウシ 廊下にならぼつか！」

しかたなく無言のまま廊下に2列にならばされた 右どなりには
こわいヒト・・・

そして 一階とたどりついて わたされた本は辞書だった

ほかの人たちより 重たいのは 持たずともはつきりとわかった

こわいヒトと一緒に仕方なくもって階段をあがっていった

そしたら いきなり そのこわいヒトが足をふみはずしてこけてし
まった

あたり一面に辞書が散らばった

さすがに臆病な「ぼく」でも こけている女の子をそのままにはできなかった

「ぼく」が大丈夫か？と気にかいたら その女の子は「みんなや、気持ち悪いな」と言ってきた

「ぼく」は「ゴメン・・・」としか言えなかった

無言のままきまづい雰囲気の中「ぼく」は辞書を拾い始めた

するとその女の子が「痛っ！」といったから「ぼく」はどうした？

と良くみると ひざに擦り傷が！

これはほっておかれへんと思って「ぼく」は保健室へ行こうと言った

その女の子は「うん」とだけいつて保健室へ。ぼくは教室に辞書をおきに

重たい！！！！ 何回その言葉をさげんだか・・・

教室にたどりつき先生にその由を報告すると先生が「ぼく」に保健室にいつて様子をみてきなさいと言った

「ぼく」はほんとに嫌だった でも さからうことができずに保健室へ

保健室のドアを開けんのですえ恐怖を感じた・・・

ガラガラ・・・ 「失礼します・・・」

すると はいってすぐのところでアノ女の子がすわって傷を手当てしてもらっていた

女の子「何しに来たん？」

「ぼく」「アっっそっその　っあ　先生が　見て来いって・・・」

女の子「別にみていらんし！教室もどったら？」

「ぼく」「そっそうですヨネ・・・ハ・・・ハハア」

「保健室の先生」「何いってんの　もう少しでおわるから　待ってなさいよ」

「ぼく」「アっ　わかりました」

女の子「なんやねん・・・気持ち悪いな」

「ぼく」「っ！ごめんなさい」

女の子「何？　ウチのことビビってるん？」

「ぼく」「いや・・・そんなことは・・・」

女の子「そんなのことは？」

「ぼく」「・・・はい・・・少しビビってます」

女の子「ハア？　なに女子にビビってるん？　ほんまウケるわぁ」

「ぼく」「・・・」

女の子「おもしろいやつやな　名前なんて言うん？」

「ぼく」「ぼくは「ぼく」(このときは自分の名前を言った)です。」

女の子「へえ」「ぼく」くんか・・・アタシ 彪あや よろしくな」

「ぼく」「あ・・・はい よろしくお願いします」

彪「おもしろ W ありがとな 見に来てくれて」

「ぼく」「え!？」 さっき見に来てもらっても困るみたいなこと・・・」

彪「冗談やしなW ホンマおもしろいやつやなW」

保健室の先生「いいねえ　すぐに仲良なれるんやね　こどもはW」

彪「別に仲良くなったんちやいます〜」

「ぼく」 「え！そうなんですか？」

彪「冗談やし〜」

「ぼく」 「からかわないでくださいよ」

保健室の先生「ハイ！　これで　手当ておしまい。二人仲良く教室までもどきなさい。」

彪「ハァ〜〜イ　んじゃ　いこつか？」

「ぼく」 「っア！　はい」

・
・
・
これが 「ぼく」と彪の出会いであった。

続く
・
・
・

第一話 出会い（後書き）

これは作者の実体験をもとに作成した小説です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4365g/>

青春・片思い 「ぼく」のとき

2011年2月3日14時23分発行